「黄昏時の物々交換」（木戸要平）

平凡でありふれた毎日を送ってきた。当然この先も、代わり映えのない毎日が続くものだと思っていた。
独りで来てしまった。日本三名園の一つ、兼六園。ここは彼女と訪れた想い出の地。四季折々の美しさを楽しめる庭園だ。
恋人に別れを告げられた。彼女は僕に嫌気がさしたのだろう。
丸みを帯びた滑らかな短い橋の上、立ち止まる。今日も多くの観光客が足を運んでいた。限りなく広がる池は穏やかに緑を映し出している。さらさらとした感触に目を閉じた。
「えっ？」
目を開けた時、その光景に思わず声が出た。観光客達で賑わっていたはずの園内に、誰も居ない。消えてしまっていた。
「珍しいわね。あなたがこんなところにひとりで来るなんて」
「京子？」
橋の上に立っているのは僕に別れを告げた恋人だった。
「どうしてここに？」
「なに驚いた顔してるの？」
「そりゃ、驚きもするだろ？　どうしてあれだけの人が居なくなってるんだよ」
「大丈夫よ、あの人達は消えてなんかいないから」
「訳分かんないよ」
「むしろ、あなたが取り残されてしまっているの」
「えっ？」
「あなたは黄昏時に迷い込んだ。時の、ねじれの中に居るの」
「時のねじれ？　なんだよそれ」
「黄昏時に入る一七時を刻もうとした一瞬のねじれ。その一秒をまたぐ、零と一の間に居る」
「説明を聞くほど意味が分からない」
「時を進めて黄昏時を迎えることが出来なければ、一生ねじれの中から抜け出せないわよ」
「信じられないよ、そんなこと」
「なに言ってるの？　現にこんな不思議な出来事が起きているじゃない」
「そりゃ、そうだけど……でもどうすれば、時を進めることが出来るんだ？」
「ねじれから抜け出す為にはなにかを手放して、なにかを手に入れないといけない。物々交換よ」
「なんだよそれ。というか、なんで京子がここに居る？　音楽の夢を追う為に東京に行ったは

ずだろ？」
「そうね。あの日上京を理由に別れを告げたわよね。私が交換する品物はこれ。東京行きの、夜行バスのチケットよ」
「えっ？」
「さぁ、あなたはなにを手放す？」
「なにって、なにが良いんだ？」
「大事な時を手に入れるんだもの。大事な物を失って」
僕さ咄嗟に鞄に手を突っ込み、中身を探った。
「あっ……。」
包装された小さな箱を取り出す。
「なによ、それ」
「オルゴールだ。あの日京子に渡そうと思ってた。だけど渡せなかった。京子のこと応援出来なくて。音楽の詰まったこれを渡してしまうと京子の夢を認めることになる」
「分かった。これで良いのね。それじゃあ、物々交換成立ね」
辺りは光に包まれ、身体が宙に浮く。身体に風をまとう。
「ま、眩しい。なんだこれ」
不思議な力でどこかへ流されて行く。
「ここは……。」
ゆっくりと起き上がり、辺りを見渡す。
「どうして、21 世紀美術館に？」
レアンドロ・エルリッヒ作の『スイミング・プール』。プールを介して地上と地下の人が出会う仕掛けが施されている。
見上げる水面の向こうに京子がいる。京子は水の底にいる僕を覗き込む。
「あれ……。」
どうしてだろう？ 京子への恋心は冷めきってしまっていた。まるで過去の人。自分の中で終わったことになっている。京子と向き合うが、心が痛まない。ただ少し、居心地が悪いだけ。
「私達、きっとやり直せる。東京行くのやめたの」
「嘘だろ？」
「だから、ずっと傍に居て」
「京子……ごめん」
「どうして？」
「もう、遅いんだ」
僕はふと、シワを作った夜行バスのチケットを握り締めていることに気づく。

「お願い、離れてしまわないで」
そうか、そういうことか。物々交換は感情も、現実さえも変えてしまうんだ。夜行バスのチケットを失った京子は東京行きを断念し、ここへ留まる運命となった。反対にオルゴールを渡した僕は、音楽の道へ進もうとする京子を受け入れ、認める事が出来た。つまり立場が逆転した。
「相変わらず淋しい奴だな。独りでこんなとこ来てんのか？」
「えっ。富沢……。」
「あの頃が懐かしいよな。そうだろ？ 虐められっ子」
「俺はあの頃とは違う。変わったんだ」
虐められていた高校生の頃、この美術館にはよく訪れていた。円形でガラス張りの館内外には、五感で楽しめる作品が並ぶ。時には考えらされるように、時には寄り添うように、僕を包んだ。
「時計を見てみろよ」
「なに……。」
腕時計は 16 時 59 分で止まったまま、時を刻むのをやめている。
「お前はまだ、時のねじれから解放されていないんだよ」
「終わっちゃないのか。時を進める旅は」
「それじゃあ、物々交換だな。お前は夜行バスのチケットを差し出せ」
「富沢はなにを出すんだ」
「お前の上履きだ。なくなってたろ？ お前、日が暮れるまで学校中探してたよな」
「やっぱり、そうだったか。富沢の仕業なんだな」
「俺だよ。焼却炉の中に捨てたんだ」
思い出さないように蓋をしてきた過去が蘇る。
「それじゃあ交換だ。チケットを出せ」
辺りは光に包まれ、身体は宙に浮き、風をまとう。
「くそ、またか」
不思議な力でどこかへ流されて行く。
「今度はどこだ……。」
目の前に続く S 字型に伸びる赤い橋。
「ここは……。」
あやとりはしだ。渓谷沿いの遊歩道へ散策に訪れたことがある。こおろぎ橋から黒谷橋までの区間をさすこの場所を鶴仙渓という。春は新緑に癒され、夏は水の流れる音で涼み、秋は紅葉を魅せる。鶴仙渓でしか味わえない風情がある。
「やめて。やめてくれ。これ以上は」
「どうして、あの頃の富沢が……。」

そこにはチケットを握り締め、怯えた目でこちらを見る高校生の富沢が居た。
「もう懲り懲りなんだよ。虐められるのは」
「えっ？」
「俺、転校するんだ。親戚の家もあるからな。今日、夜行バスに乗ってこの街を出る」
「虐められてる？」
「どぼけるなよ。お前が中心となって酷い事したじゃないか」
この時に初めて記憶の異変に気づく。
「あれ……。」
僕の記憶が書き替えられている。虐められていたはずなのに……僕が真ん中に立ち、富沢を虐めてしまっている。まるで立場が入れ替わっていた。
そうか。上履きを手に入れたことで焼却炉に捨てられてしまった過去が消滅したんだ。反対にチケットを渡した事で富沢はバスに乗り転校先の学校へ行く事になったんだ。
僕がされて嫌だったことを、富沢にしている。虐めるという立場に回った自分を嫌いになってしまいそうだった。
腕時計を見るが時間を刻んではくれなかった。まだ、物々交換は続くようだ。川沿いを宛てもなく歩く。鳥の鳴き声と澄み切った空気の中を進んでゆく。
「おい、嘘だろ？」
砂利道には水槽が置かれている。中には見覚えのあるミドリガメが首を伸ばしていた。
「くるりなのか？」
幼い頃、縁日の屋台で貰って帰り、くるりと名前をつけ、大事に育てていた亀だ。手の平に乗るほど小さかったのに、こんなにも大きくなった。
「でも、どうしてだ？ 死んだはずだよな。これが時のねじれっていうやつなのか？」
内気な僕にとって一番の友達だった。まさかこんな形で再会をするとは……。
「まさか、お前と物々交換するっていうのか？ その水槽しか差し出せるものはないだろ？」
辺りは光に包まれ、身体が宙に浮く。身体に風をまとう。
「次はどこへ行けっていうんだよ。終わりはあるのか？」
不思議な力でどこかへ流されて行く。
「うっ……。」
目の前には大人しい海が限りなく続いていた。その海の青は、空の青と混ざり合い、境界すらないように思える。
振り向いた時、それに気づいた。幸せの鐘だ。この鐘を恋人同士で鳴らすと深く愛が結ばれると言われている。その名も恋路海岸だ。
「水槽を手放した亀は、川に帰ったみたいだね。上履きを受け取ってくれたからふたりの間に

虐めもなくなった」
「かすみ……どうして？」
「物々交換、しにきたんだよ」
ずっと一緒だった。一番、近くに居ると思っていた。それなのに大人になった今、誰よりも遠く感じる存在だ。
「こうして話するにもぎこちないよね。きっと、私達」
「いつぶりだろうな？ 時間を作ればいつでも会えたはずなのに」
「そういうとこ、変わらないね。壊れるくらいなら触れないんだよ。いつもそうだった」
「それは……。知ってたから。かすみに恋人が出来たこと」
「叶わない恋を追うのはやめたの」
「どういうことだよ、それ」
「亀にだって名前をつけてるような人だったもんね」
「当たり前だろ。友達だと思ってたんだから」
「お好み焼きだってピザみたいに切り分けるし」
「その方が食べやすいだろ？」
「地味に優しいから伝わり辛いしね」
「地味は余計だ」
「どうして私達、会わなくなっちゃったのかな？」
「なんでだろう……。」
ふたりして黙り込む僕等を夕日が包む。
「それじゃ、交換しようか……。大事な水槽を頂戴」
「かすみはなにを差し出すんだ？」
「私は、これ。日記を渡すわ。ただ、水槽を貰ってしまったら、私達、出逢わなかったことになるね」
「小学生の頃、困ってるって聞き付けたかすみが水槽くれたんだよな。別々のクラスだった訳だし、水槽というきっかけがなくちゃ出逢ってないな」
「これを交換してしまった時点で私達は他人よ」
「やっぱり……出来ない」
「交換するっていう選択肢しかないわ。だって、あなたは一生この時のねじれから抜け出せないんだもの」
「どうにかならないのか？」
「運命は変えられない」
「……なぁ、かすみ。あの鐘、いっしょに鳴らさない？」

「なにそれ、相変わらず分かりにくい人だ」
夕日が滲む海を背景に僕らは遠慮がちに鐘をならした。その甲高い音は空に消えてゆく。
辺りは光に包まれ、身体は宙に浮く。そして、風をまとう。
「さよなら」
不思議な力でどこかへ流されて行く。
僕は丘の上にいた。段を作る水田は丸みを帯びて海まで伸びていた。水田の緑も、海の青も、夕日に照らされて輝いている。
僕はかすみから貰った日記を読んでいた。くだらない僕との日常や、気づくことの出来なかった気持ちが綴られている。悔やんでも、悔やみきれない後悔が襲う。
「よくここまで来たな。見ないうちに頼もしくなったもんだ」
「親父」
「安心しろ。これで最後だ。お前は時を取り戻せる。どうだ？　良い旅になったか？」
「今まで気づかなかったとても大事なものを失ってしまったんだ」
「でも、お前は大切な時間を取り戻せる。なによりだろ」
「最後になにを交換するんだ？」
「お前の日記と、俺の結婚指輪だ」
「冗談だろ？　指輪を失ってしまったら、親父が結婚しなかったことになる。それじゃ、俺、親父の子供で居られなくなるじゃないか」
「それでも、時間を刻めるようになるんなら安いもんだろ」
「そんなの出来ない。嫌だ。これ以上、大事なものを失いたくない」
「困った奴だな。一生、時のねじれを彷徨うつもりか？」
「それでも、良いよ。もう、終わりにしよう、親父」
「本当に、それで、良いのか？」
「あぁ、後悔はない。最高の人生だった」
辺りは光に包まれ、身体が宙に浮く。そして、風をまとう。
「俺、消えてしまうのか」
不思議な力でどこかへ流されて行く。
「これで、あなたの旅は終わりを迎えた。そして、始まる」
「あなたは？」
「私に名前はない。君は最後に交換を躊躇った。一生、時のねじれから抜け出せない。だから、別の人間になってもらう」
「どういう意味だ」
「指輪を預かっている。これを君に渡そう」

「えっ？ 結局、俺は親父の子じゃいられないのか……。」
「君を救いたい。それがお父さんの想いだ。代わりに君にとって一番大事な物を差し出してもらう。それは、君という人間だ」
「えっ？」
「指輪と君を物々交換だ」

恋人と兼六園へ来ている。
僕は指輪を隠し持つ。ここで、プロポーズをするつもりだ。
「人間って凄いよな。先祖の、そのまた先祖から、ずっとずっと、命のバトンが繋がれてるんだぞ。名前も知らない誰かから渡されたバトンだ」
「急に真面目な話するのね」
忘れてしまいたくない記憶を忘れて。忘れたことすら忘れて、僕は生きている。
「もっと真面目な話して良い？」